

序

急速な質量分析計の普及と測定技術の高感度化によって、脂質の定量解析は以前と比較して身近になってきたように思われる。脂質を専門としない研究室からの論文に脂質の解析結果が掲載されることも珍しくはなくなってきた。しかしながら、他の研究室から臨床検体の脂質解析の依頼を受ける際に、解析対象の脂質の分子種を指定されることはまずなく、「とにかく脂質に何か違いがないか、見てほしい」と言われて困惑することも多い。検出可能かどうかは別に、理論的には10万種以上の脂質分子種の存在が想定され、それぞれの分子量も化学的特性もさまざまである。すべての脂質分子種を解析できる研究室など存在しないだろう。臨床検体を例にとっても、血清は血液凝固に伴い一部の脂質が産生されたり分解されたりするため、脂質の解析には適しておらず、適切にコントロールされて回収・保存された血漿を用いなければならないが、こういった「脂質の常識」もまだまだ広く知られていないように思われる。こうした基本的な知識の普及には本増刊号のような日本語で書かれた総説集がきわめて有効と思われる。2015年に発行した「脂質疾患学 なぜ“あぶら”の異常が病気を引き起こすのか？」は幸いなことに高い評価をいただくことができたようで、今回、「治療標的がみえてきた脂質疾患学」の編集の依頼を頂いた。本増刊号では対象を脂質生物学全体に拡大し、より多くの先生方にそれぞれのご専門の脂質の生命現象における役割と、最新の解析技術の解説をお願いした。集まった原稿を拝見して、いずれの分野でも大きな研究の進展があったことに驚きを覚えた。この8年間で急激にグレードアップした日本の脂質研究の集大成を楽しんで頂き、脂質に対する理解が深まる一助となれば幸いである。

2023年6月

横溝岳彦, 村上 誠